

絵と言葉のリズムによる打楽合奏曲作成への試み①

—子どもがリズムを理解する一助となる絵と言葉の楽譜の検討—

桂山 たかみ 松本 亜香里*

要旨

保育者養成課程のある大学では、養成課程に義務付けられていない音楽に関する科目がおかれる養成校が多い。その中で、多くの大学でピアノ等鍵盤楽器に触れる機会があることが養成校のシラバスから伺える。理由としては、幼児教育の中でピアノが子どもの感性の表現を助長する手立てとして、近年の保育現場でも活用されているからである。一方で、保育者志望の学生の中で、読譜力やリズム理解の困難さを抱える者は多い。それはピアノが弾ける学生も例外ではない。そのような学生が、将来保育者として器楽合奏指導をするにあたり、効果的な教授法の検討を重ねてきた。

本稿は、保育者養成校で1年次前期に開講される「リズム遊び」の授業実践を示し、その講義内容と学習成果について考察するものである。保育者の学びにおける「リズム」の表現方法にはさまざまなものがあるが、一連の研究に引き続き本稿では、保育者の子どもに対する「絵と言葉による器楽合奏楽譜作成」への取り組みに着目した。その中で、使用する絵と言葉のジャンルを配慮したり、一つの言葉でもオノマトペを使用し、子どもがより譜面上の言葉を覚えやすいよう工夫していたり、様々な思いをもって絵譜の作成に取り組んでいることが調査の中で明らかになった。また、絵譜作成を経験する中で、その有用性と今後活用したいという回答も多くみられた。

今後の課題として、保育者自身が「楽しさ」を感じながら、いかにして子どもたちが音楽を味わいながら、微妙なニュアンスの表現をして、一つの曲を作り上げていくかということを軸に、絵譜作成時の配慮事項の検討や表現方法の可視化が挙げられる。そのためには、筆者自らが絵譜作成の幅を広げ、また保育現場での実践を重ねる中で、子どもがリズムを理解しやすい言葉や、言葉の組み合わせの検討を行っていく必要がある。

キーワード：言葉、言葉遊び、リズム理解、領域間連携、絵と言葉の楽譜作成


* 愛知東邦大学教育学部子ども発達学科


1. はじめに


本稿では、筆者が担当する「リズム遊び」（保育士資格のための選択科目の一科目）の授業（以下、「授業」とする）における授業実践の一例を示しながら、保育において器楽合奏を指導していく教授法の一つとして「絵と言葉のリズムによる打楽合奏譜」（以下、絵譜）を作成する過程での学生の意識や成長過程を検証するため、アンケート調査を行った。


絵譜は、絵で示された楽譜であり様々な見解があるが、その多くは曲のイメージを絵で表現したり、音の高低や音価を複数の絵の高低や隣接する絵との幅により表現したりして、曲の旋律を絵で示すものが見られる。読譜指導が目的の一つという点は共通しているが、ここでは曲の旋律を絵譜化せず、旋律を支える打楽器パートを絵で作成し器楽合奏曲として、絵と言葉のリズムで表現する絵譜（図1）作成に取り組むこととする。また作成していく過程で、楽譜に使用する物の名前の前後に、関連するオノマトペを使うことで、音楽初心者の学生が楽譜作成するにあたってどのような効果があるのか、器楽合奏をする上で保育者から子どもへの効果的な伝わりについて検討する。

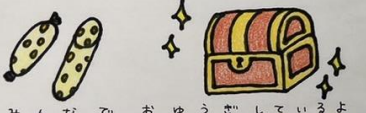
めだかの学校 (前奏ピアノ2小節) 楽譜 保育のうた 12ヶ月 216

A ||:  :||
めだこ しょう かの じ

B 
かわの なか









C 
そっと のぞいて みでこらん









D 
そっと のぞいて みでこらん







E 
みんなで おゆうぎしているよ





演奏
イントロ→[A→A→B→C→D→E]

【エピソード】

鈴        
とまと かわの なか (めだこ) しょう かの じ しょう かの じ しょう かの じ しょう かの じ

タンバリン        
とまと かわの なか (めだこ) しょう かの じ しょう かの じ しょう かの じ しょう かの じ

小太鼓      
かわの なか しょう かの じ しょう かの じ しょう かの じ しょう かの じ

大太鼓    
しょう かの じ しょう かの じ しょう かの じ しょう かの じ

ポイント

- 各楽器専用のイラスト(ソロパート)があるので、どの楽器を担当しても構いません。
- 全小節に登場する鈴、タンバリンと小太鼓の掛け合い、大太鼓の合いの手に注目です。
- ラストは歌詞の「みんなでおゆうぎしているよ」のようにみんなで同じリズムを演奏します。息のつたりの子どもたちの頭張りに感動すること間違いなしです。

※音楽活動に力を入れている園または保育所に通う4歳児さんからイメージしました。

図1 絵譜例

2. 目的

本稿は、保育者養成校で 1 年次前期に開講される「リズム遊び」の授業実践を通して、絵と言葉のリズムによる打楽合奏曲作成の過程を検証する事を目的とした。この学びにおいて、楽譜作成で使用する絵に対しての言葉の表現方法が、学生のリズム理解と様々な楽器の様々なリズムのバランスを配慮できる、つまり拍子感を持って譜面作成に取り組める事を目指す。

3. 研究方法

(1) 調査対象

対象授業科目：「リズム遊び」シラバス 12～15 回目の授業内

対 象 者：ユマニテク短期大学幼児保育学科 1 年次「リズム遊び」を受講する
学生 53 名中 50 名（3 名欠席）

(2) 調査時期

実 施 時 期：2023 年 6 月 8 日、15 日、22 日、29 日 計 4 週（回）

アンケート調査日：2023 年 6 月 29 日（実施最終日）

（第 12 回授業から第 15 回授業内での実践活動後）

(3) 調査方法

インターネットサービスの Google フォームを用いて、授業内にアンケート調査を行った。アンケート実施前にアンケートの主旨と使用目的、倫理的配慮について口頭で説明し同意を得られる場合のみ回答をしてもらうよう伝えた。

(4) 調査内容と分析

アンケートの質問項目は、2～4 件法の選択式による「楽器経験について」「絵の楽譜の閲覧経験について」「絵の言葉で打楽合奏経験について」「選曲について」「言葉にリズムを当てはめることについて」「絵の種類について」「絵の名称へのオノマトペの利用について」「絵と言葉の楽譜作成について」「絵と言葉の楽譜作成の継続について」「絵と言葉の楽譜の使用について」の計 10 項目とした。分析方法として、各回答の割合を算出し、リズム理解や絵と言葉による楽譜作成の理解や関心を分析した。

(5) 倫理的配慮

本調査は、目的を明示した上で回答は自由意思とし、統計処理により個人が特定されないように配慮した。なお本研究はユマニテク短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て行われた。（承認番号第 23-003 号）

4. アンケート調査結果と考察

(1) 楽器経験について

大学入学までの楽器経験の有無は楽譜作成へ大きく影響するため尋ねた。「ある」と回答した学生は 62% となり、半数以上が何らかの楽器を経験していることが明らかになった。(図 2)

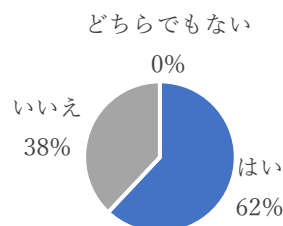


図2.楽器経験について

(2) 絵の楽譜の閲覧経験について

絵譜のような絵で表されている楽譜を見たことがあるか尋ねたところ、「見たことがない」と回答した学生は 78% となり、この研究に独創性が伺えると同時に、先入観がない状態で活動に取り組めることが期待できる結果となった。「はい」と答えた学生 22% は、筆者が担当した大学入学前に参加したオープンキャンパスや高等学校への出張授業等の行事において知ったことが過去の参加者名簿から分かった。(図 3)

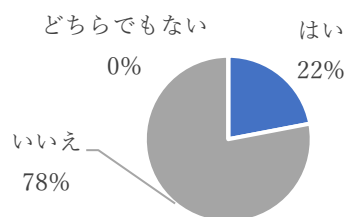


図3.絵の楽譜の閲覧経験について

(3) 絵と言葉で打楽合奏経験について

絵と言葉で打楽合奏の経験があるか尋ねたところ「なし」と回答した学生は 84% となり (2) の結果同様、独創性が伺える結果となった。「はい」と答えた学生 16% は、筆者が担当した大学入学前に参加したオープンキャンパスや高等学校への出張授業等の行事において知ったことが過去の参加者名簿から分かった。(2) の問から 6% 減少しているのは、経験したが演奏したことまでは覚えておらず「いいえ」と回答したことが考えられる。(図 4)

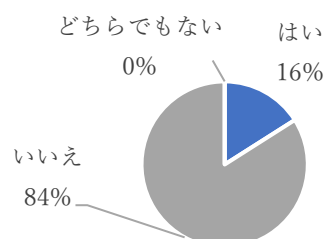


図4.絵の言葉で打楽合奏経験について

(4) 選曲について

絵と言葉の楽譜を作成する際に、元となる曲を自分で選曲する事について尋ねたところ「簡単だった」が 54%、「難しかった」が 36%、「どちらでもない」は 10% となった。(図 5)

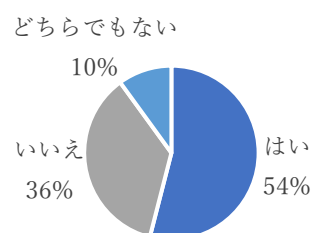


図5.選曲について

(5) 言葉にリズムを当てはめることについて

楽譜に使用する絵の言葉（絵の名称など）を、リズムで表すのは容易であったか尋ねたところ「難しかった」が 72%、「簡単だった」が 16%、「どちらでもない」は 12%となった。言葉のリズムを口ずさむ事はできるが、音符で表わす事に難しさを感じる学生が 3/4 近くとなった。（図 6）

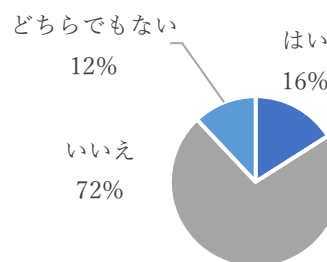


図6.言葉にリズムを当てはめることについて

(6) 絵の種類について

楽譜に使用する絵の言葉（絵の名称）の、ジャンルは揃えたかと尋ねたところ「揃えた」が 60%、「揃えていない」が 36%、残りは「少し揃えた」「自分の好きなものを取り入れた」などの回答であった。1 曲中に使用する絵を歌詞の内容に関連した絵で揃えたり（例：山の音楽家の場合「動物」で揃えるなど）、様々なリズムを一つのジャンルの中から用いたり（例：様々な文字数の「くだもの」で揃えるなど）する事は、容易ではない事が分かった。（図 7）

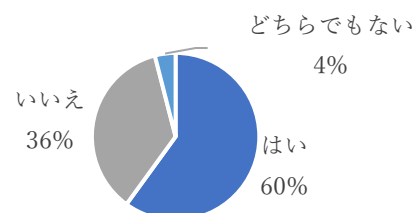


図7.絵の種類について

(7) 絵の名称へのオノマトペの利用について

楽譜に使用する絵の言葉（絵の名称）に、オノマトペを使用した言葉を使ったか尋ねたところ「いいえ」が 54%、「はい」が 46% となり使用しなかった学生が少し上回った。これは、絵譜作成のポイントとして筆者が学生に向けて、いくつかの小節にまたがる場合、言葉とそれに関連するオノマトペを考えると子どももいくつも言葉を覚えなくても譜面を覚えやすいということと、オノマトペを使用することによって奏法をイメージしたり、言葉の意味から曲想を工夫したりし、演奏することができることを伝えたことも影響していると考えられる。（図 8）

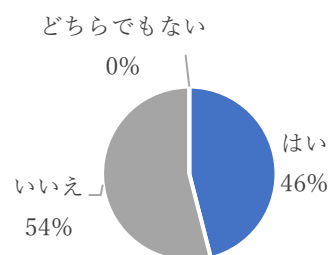


図8.絵の名称へのオノマトペの利用について

(8) 絵と言葉の楽譜作成について

絵と言葉の楽譜を作成して楽しかったか尋ねたところ「楽しかった」が 94%と、大半の学生が楽しさを感じたという結果となった。読譜力やリズム理解の困難さを抱える学生が多い中で、既存の楽譜を使用するのではなく、自分で絵譜を作ることに楽しさを感じながら打楽合奏曲をアレンジできるのであれば、本研究目的であったリズム理解に意欲的に取り組める一助となることが考えられる。(図 9)

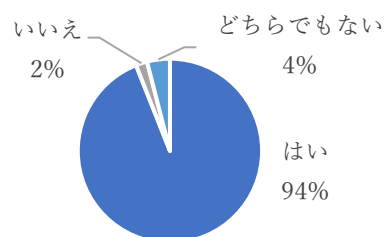


図9.絵と言葉の楽譜作成について

(9) 絵と言葉の楽譜作成の継続について

絵と言葉の楽譜作成を今後も勉強していきたいか尋ねたところ「はい」が 92%となり、大半の学生が今後も学びたいという意欲的な結果となった。本研究では授業における 4 週内での取り組みとなったが、今後この調査結果を踏まえて、その他音楽関連科目も含めて、学生が希望する学修内容も勘案しながら授業内容をトータルデザインしていくことも検討課題である。(図 10)

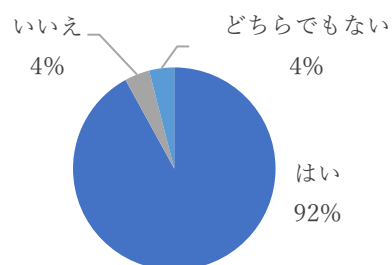


図10.絵と言葉の楽譜作成の継続について

(10) 絵と言葉の楽譜の使用について

保育者として現場で子どもたちに、絵と言葉の楽譜を使用し器楽合奏をするか尋ねたところ「はい」が 90%となり、9 割の学生が絵と言葉の楽譜に興味・関心・将来性を感じ、自分も理解しやすく、子どもへも伝えやすいと考えた事が伺える。当初リズム理解に困難さや不安を抱えていた学生が、このように自分が指導することに前向きに考えられるようになったことは、将来保育者となった時に会うであろう子どもたちの音楽的表現においても多大な影響を与えるであろう。保育者自身が必至に指導しては、子どもたちにも緊張感が伝わったり面白さを感じながら表現できなかつたりする可能性も否めない。一方で、保育者自身が「楽しさ」をもってかつ、絵譜の意義を感じながら指導に当たることは、子どもの表現活動を助長することにつながるであろう。(図 11)

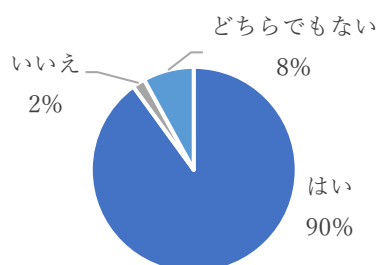


図11.絵と言葉の楽譜の使用について

5. まとめ

本稿では、「リズム遊び」の授業実践例として、保育において器楽合奏を指導していく教授法の一つとして「絵譜」を作成する過程での、学生の意識調査や成長過程の考察を行った。

楽器演奏経験の無い学生が半数以上、絵譜を見たことが無く絵譜での演奏経験もない学生が約 8 割を占める中での絵譜作成は、困難を極めるであろうと予想される。しかしながら、本稿で得られた結果では、主に楽器経験の無い学生が絵譜作成に使用する選曲を、短曲や単調とした場合、絵の言葉をリズムにあてはめやすく、絵の種類や数も少なく完成し容易に作成できることが分かった。一方で、少し尺の長い曲または抑揚のある曲を選曲すると、絵と言葉のリズムでその抑揚を表現するため、難しさを感じる事が推測される。保育者として子どもに伝える場合、絵の種類はより少ない方が子どもは覚えやすく負担が軽くなるため、尺の長い曲を選曲した学生は、授業の冒頭で説明をおこなったオノマトペを上手く利用し曲を完成させていた。オノマトペを使用する事により、例えば、小節をまたぎ容易に 8 拍は 1 つの絵で表現できるため、1 曲中で使用する絵の数が少なくできる。日本の子ども向けの絵本は、感覚的で分かりやすいだけでなく声色や発話のリズムも良いため、オノマトペが多く使われている。保育現場でも乳児向け絵本の選書理由として「オノマトペ」を挙げていることも先行研究で分かっている。このことから、絵譜でのオノマトペの使用は、子どもへの伝えやすさの効果は期待できるといえよう。学生自身もまた、学外実習未経験でありながらも保育に関する科目を履修してきているので、オノマトペの有用性について理解していることが推察される。その根拠として、曲中に様々なオノマトペを使用し、複雑なリズムを容易に刻める工夫がなされた譜面がいくつかみられた。

最後に、この授業受講者の 9 割以上が絵と言葉の楽譜について「今後も学び続けたい」「将来保育者として使用していきたい」との回答から、音楽初心者の学生や、経験ある学生も音符で示された器楽合奏楽譜より、絵で示された楽譜の方が楽しい、演奏しやすい、子どもへ伝えやすいという結果となった事は明らかである。

今回の取り組みの中で、リズム理解だけでなく譜面上の強弱を絵と言葉で理解できるような工夫も応用できるよう教授してきたが、今後は強か弱だけでなく、だんだん強くしたりだんだん弱くしたり、その曲のもつ音楽性をどのように表現していくことがまだ至っていないことが課題として残った。本調査結果のように、保育者自身が「楽しさ」を感じながら、いかにして子どもたちが音楽を味わいながら、微妙なニュアンスの表現をして、一つの曲を作り上げていくかということを軸に、絵譜作成時の配慮事項や表現方法の可視化を検討していきたい。そのためには、筆者自らが絵譜作成の幅を広げ、また保育現場での実践を重ねる中で、子どもがリズムを理解しやすい言葉や言葉の組み合わせの検討を行っていく必要がある。

参考・引用文献

- 1) 松本亜香里, 山野栄子, 市川沙織: 保育学生が選ぶ乳児の絵本, pp191-200, 鈴鹿短期大学紀要第 33 巻, 2015
- 2) 窪菌晴夫 (2017) 『オノマトペの謎 (ピカチュウからモフモフまで)』 岩波書店
- 3) 椎名 渉子: 子どもへのことばがけの分析を通した学びー「保育内容演習 (言葉)」における指導法の考察ー, pp99-114, 名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究第 31 号, 2019
- 4) 桂山たかみ, 松本亜香里, 山野栄子: こどもが器楽合奏を楽しむ足がかりとしてー独自楽譜の保育者養成校での取り組みからー, pp30-42, ユマニテク短期大学紀要第 5 号, 2022